

像の特徴に応じた直観像検出法

鬼 沢 貞・衛 藤 順 子・松 岡 和 生^{**}

1 直観像の特徴

直観像については、過去に経験した印象（主として視覚的）があたかも知覚のばあいと同じように鮮明かつ明細に再生されるものである、と説明されるのが一般的^{11, 16)}のようである。たしかにそれは外界に投映され定位されて「見える」という意味で知覚的ではある。それにしても、直観像を見る本人は見えるものが主観に属する出来事であり、実際にはそこに存在しはしないことを明確に知っている点でたんなる知覚ではありえない。また、知覚に認められる対象はおおむね鮮明であるのに対して直観像の鮮明性や明細性というのは一連の連続線上にあり、それらには強いばあいや弱いばあいのあることが認められることは無視しえない事実である。

そこで、さらに直観像はいわゆる幻覚とどのように違うかがしばしば問われるが、それは実物の存在と混同して意識されることはなく、まして妄想をとまなうといった意味での病的人格からの産物でもないことによって幻覚とは確実に区別することができるものである。

ところで、直観像に見られる内容のあり方に関しては、かなり以前から Jaensch, E. R.^{9, 15)}によってT型（類テタニー型）とB型（類バセドー型）との2種類に区分されることが見いだされている。前者は本人の意思とは無関係に出現して、過去の視覚的印象がほぼそのままいわば固執的に続く。他方、後者では像が有意的に生じかつその内容が変動するというのである。ところが、とくに直観像を喚起させるため、後にくわしく触れる Jaensch の創案による衝立検査を用いるとき、像の形成に当って被検者の意志が作用したかどうかは実際の手続きからは判断することができないのである。また、T型とかB型と呼ぶのは、Jaensch のきわめてユニークな理論に基づくものでもある。いずれにせよ、われわれのこれまでの経験では、直観像の内容のあり方には原刺激ないしその部分をほぼ忠実に見るものとそれがかかなり変動し、ときに自由な姿さえ見せるもの¹⁷⁾とがあることだけは疑いえないことである。そこで、われわれはそうした現象に着目し、2種類を静止型直観像と変動型直観像と呼ぶことにしているのである。

さらに、直観像はそれを喚起させるものの面からみるとき2種類を区分することができ

※ 岩手大学保健管理センター

※※ 岩手大学人文社会科学部研究生

る。つまり、一方は被験者の眼前に外部的（原）刺激を提示することによって形成させられるものであり、他方はそれによることなく被験者自身の内的喚起によって生じるもの（自発的直観像 spontaneous eidetic image）である。前者は伝統的な衝立検査といった実験条件によって形成され、後者はどちらかと言えば日常生活場面において現出することが多いものようである。

このように幾つかの特徴に基づく種類が認められるにもかかわらず、直観像は原刺激の模写（例えば、鏡のようにそのまま写しとるとか写真のように正確ななどと表現される。）であるとのみ考えられることが少なくなかった。それらが直観像の一面だけを強調していることは言うまでもなからう。

2 衝立検査（従来の直観像検出法）

いま述べたように静止型直観像にのみ注目する傾向は、これから見るように伝統的な直観像ないし直観像素質者検出の方法や手続きにも色濃い影をおとしていると認めることができる。

従来、少くとも10年ほど前までの直観像検出法の要諦は次のようなものであった。すなわち、それは予め残像検査を経て、中間灰色の衝立面の上に原刺激となる絵（有色および黒色のシルエット）を一定時間提示し、被験者に視点を固定しないで移動させつつ絵の全体を眺めまわす（走査, scanning）ようにさせる。次に、原刺激を撤去し、何もなくなった衝立面に眼を向けさせ、そこに何か見えないかと尋ねる。そして、そのときの被験者の言語的報告や態度が特定の基準に照らし合わせて検討される、といったやり方であった。

この衝立を用いる方法の先駆者となったのはウィーンの医師 Urbantschitsch, V. (1907) であった¹⁵⁾。そこでの直観像の吟味には、衝立面に見られる像の完全さとか原刺激のなかの事物の大きさや明度と像に認められるそれらとの違いとかなどが取上げられている。つまり、ここではおそらく直観像とはいわば完全な姿の像であると解釈されるのであり、それに大きな変動が生じているばあいには、もはや完全な直観像とはみなされなかったのであろう。

これを受けて組織的研究を始めようとした Jaensch は、当初成人（大学生）のなかにそれを見いだそうとしたのであるが、しかし第一次大戦中で学生数が少なかったという事情もあって、僅か2人の直観像素質者を発見するにとどまった。その後、彼の検出法は大いに洗練され、さらに被験者を子ども（小学生）に求めたことが成功し、その理論も急速な進展を見せた。従って、これから述べる方法に被験者とされたのは小学校中学年以上の子どもである。もちろん、Jaensch の理論からすればそれ以下の年齢の者についての検出も

要請されたのであるけれども、低年齢の子どもにおいては言語報告が不確かであるなどのため、検出の実施は不可能であった。

さて、Jaensch らいわゆる Marburg 学派の影響下にあった研究者間では、直観像素質者の判定にあたっては、次の検査法が使用されていた。そこでは残像検査や色紙検査が実施されるが、それは直観像が残像（＝感覚）と表象とを対極とするとき両極の中間に位置づけられるとする Jaensch の理論に裏付けられているのである。

（１）残像検査

灰色の衝立面上に色紙（5.0cm×5.0cmの正方形、赤色など）を提示する（提示時間は少なくとも20.0秒間）。観察距離は50.0cmとする。正方形の中心点には注視点を設け、被験者にはそこを注視させる。色紙を撤去した直後に衝立面に投映される残像が色紙の色に近い積極性（陽性）のとき、またその持続時間が長いときには直観像素質者である可能性が大きいと判断される。ただし、残像の持続時間が長いといっても実際に何秒以上が長いとすべきかの基準については指示されていない。衝立面に「（投映されて）見える」とはどんなことかを被験者に理解させるためにもこの検査は必要だとされる。

（２）色紙検査

（１）と同じ色紙を衝立面に5.0秒間提示する。この短かい刺激時間によって、衝立面に何らかの再生が生じる者には直観像をもつことが多い。ただし、この検査においては、色紙提示期間中眼はかならず走査させる。（１）の残像検査の翌日に実施するのがよいとされる。

（３）複雑な黒白シルエット、絵はがきなど小型の絵画による直観像検査

シルエットも絵も被験者の興味をひくようなものとし、それを衝立面に15.0秒間提示する。原刺激の大きさについてとくに指示はないけれども、絵はがきなどが適当だとされているので、その程度の大きさと考えてよい。原刺激に対しては眼を走査させ、それを撤去した後に衝立面に何が見えるかを言語報告させる。

残像検査および色紙検査の結果によって被験者が直観像素質者であるかどうかについては、かなりの見当がつくのであるけれども、さらに進んで最後の直観像検査によって報告されたものが直観像であるかどうかについては、

- ① 眼球の運動（像を観察するときに眼を走査しているかどうか。もし、それが直観像であるならばかならず走査をとまなうものである。）
- ② 衝立の見方（直観像を見る子どもの見方は衝立の上に実際の事物を見ているときの表情、態度、舉動と異なる。）
- ③ 言語報告時における一般的態度（直観像素質者には「ここに、こんなに見えるのではないか」といった表現や態度が認められる。）

などの基準によって判定することができるかとされている。

Jaensch らによれば、直観像は一方では表象と同じく主観性や変動性を示す (B型) が、他方知覚と同じように鮮明性や空間的的定位、客観性などをもつ (T型)。とくに後者の特徴を客観的に立証する方法としては、直観像が知覚の特性である

- ① 色彩混合
- ② Purkinje 現象

などを示し、これらの実験が可能であることがあげられる。直観像素質の判定に当って彼らは、像の鮮明性や活発性、変動性、細目性などが規定の徴候となるとし、表1に見るように直観像を6段階に分ける。しかし、その段階づけにおいては、正確な知覚のような直観像は高段階に位置づけられるけれども、変動を見せる像には然るべき位置づけがなされてはいないのである。そもそも Jaensch はB型を子どもに最も多く見られる基準的な類型と考えていたのであるが、しかし彼の検出法においてはむしろ動かない直観像が主要な対象とされていたと言えるのであって、まさにここにわれわれが修正を求められる問題が認められるのである。

ところで、われわれにとってさらに見逃すことができないのは、このように衝立面上に先ず原刺激となる絵画等を提示し、それを撤去した後に衝立面への反応としての像を調べる、といったやり方によっては、すでに触れたような像出現以前に原刺激提示を必要としない自発的直観像が検出されえないことである。自発的直観像の存在については Allport, G. W.²⁾ (1924) によって確認されているにもかかわらず、Jaensch による衝立検査が普及し一般化したためかその後この種の直観像についての検出法はとりたてて開発されるにいたらなかったのである。

最近、20世紀に入って間もなく隆盛をきわめた直観像の研究がやがて衰微することになった事情についてはさまざまあげられている。われわれにとっては、その検出法がほぼ画一的なものであり、衝立を使用するやり方だけに終止したという方法上の制約もその主要な理由に思われてならない。このような制約をなくし、然るべき検出法が考案されていたならば、内容が変動する直観像および自発的直観像をめぐってさらに進んだ研究がなされていたことであろう。

ともあれ、直観像の研究は40年近く経って復活することになった。その機縁を与えたのは、Haber 夫妻 (Haber, R. N. and Haber, R. B. 1964) の論文⁵⁾ であるとされている。彼らは、その当時 Sperling, G. (1960, 1963) らによって見いだされたばかりの短期の情報貯蔵の研究に触発され、刺激の記憶への転換が感覚記憶 (icon) と直観像との間で平行的モデルとして示されるかもしれないと考えたのであった。しかし、感覚記憶と直観像とは再生までの時間間隔に大きな差があることなどかなり異なった点があるため、この考想は

簡単に破棄されなければならなかった。

それでも、そこでの直観像検出法にはより精密な客観的基準が使用されており、それに従えば研究者間の研究結果の比較が容易であるため、確立された方式と認められたのである。このことが、直観像研究の再生につながったわけである。その方法は次のとおりである。

(1) 残像観察測定

12.0 inch (タテ) × 10.0 inch (ヨコ) の中間灰色の板を同色の衝立面 (ヨコ 30.0 inch × タテ 24.0 inch) に提示する。衝立はその面を被験者に向けるが、被験者と反対側にやや傾けておかれる。板の中央には原刺激となる 4.0 inch × 4.0 inch の正方形の色紙が貼られる。その色は赤、青、黒、黄であるので、それぞれの色紙に応じた 4 枚の板を準備する。原刺激板は赤、青、黒、黄の順序で提示し、被験者はいずれについても眼を走査させず、正方形の中心を注視する。注視時間は 10.0 秒間とする。これらの条件によって生じた残像の色調および持続時間が調べられる。

(2) 絵画による直観像検査

残像観察測定が終了した後、原刺激の絵 (色彩絵 2 枚、白黒のシルエット 2 枚) を順次衝立面に提示する。絵の大きさについてはとくに指示されていないけれども上述の板と同じと推定される。とすれば、原刺激は Jaensch らのものよりかなり大きいことになるが、この方が被験者の眼の走査の有無を実験者が確かめるのには便利ではないかと考えられる。眼は走査させながら 30.0 秒間絵全体を眺めまわす。原刺激を撤去し、衝立面に何か見えるか尋ねる。観察距離は 60.0 cm とする。

以上の実験中の被験者の言語報告および実験者の質問の音声はすべてテープに収められた。その音声は後で再生され、次の 8 つの事項について評定がなされる。評定者は Haber ら 2 人であったが、それぞれの評定間には高い相関があり、このやり方の信頼性が高いことが認められた。8 つの事項というのは (1) および (2) について、

- ① 正方形に対する像と絵画に対する像とに見られるそれぞれの色彩が陽性であるかどうか。(もし像が陰性であるならば残像である。)
- ② 正方形と絵画とに対するそれぞれの像の持続時間。
- ③ 絵画に対する像と絵画に対する記憶心像とのそれぞれの色彩の正確さ。5 点尺度によって評定される。
- ④ 絵画に対する像と絵画に対する記憶心像とのそれぞれの細目の正確さ。9 点尺度によって評定される。

とされる。

このような評定に基づいて直観像素質者を判別するのであるが、その際にさらに進んで

基準となるべきもの次の諸点があげられている。

- A. 4枚のどの絵画に対しても像を形成し、その上像が40.0秒以上の持続時間を有すること。
- B. ④の細目の正確さに対してはおおむね8点ないし9点の評価が与えられ、6点以下ということはないこと。
- C. どの絵画においても、被験者がそれを見るばあい、まちがいなく眼を走査していること。
- D. 絵画の像はかならず被験者の眼の前の「そのところ (out there)」に実際に存在しており、その細目についての言語報告は現在時制によってなされること。(像が被験者の頭の中にあるとか見えると思うとか、過去形によって報告されるときには、直観像ではなくたんに記憶心像にすぎないとされる。)

ところで、このHaberらの検出法においては、Jaenschらにおける色紙検査は省略されている。たしかに、Jaenschの検出法全体をわれわれが見ても色紙検査には必然性がなく何か付加的な感じさえするのを認めない。原刺激は残像実験のそれであるが、しかしねらいは直観像の喚起なのであるから、実験としては中間的であつあいまいでもある。さらに注視時間は僅か5.0秒間とされており、この間に十分に走査させることは困難なのではなかろうか。こうしてみると、この検査はそのねらいから直観像検出に含ませてよいと判断される。そのようにすれば、直観像素質者検出検査は2日間にわたらなくてもすむことになろう*。

以上のHaberらの検出法において用いられた事項や基準について見ると、どちらも像が原刺激にどれほど正確に一致しているかが判定にとってきわめて重要なきめ手とされていることが明らかになる。つまり、ここでも直観像とは、普通のばあいの知覚と同じように刺激を忠実に反映するものであると考えられそのことが尊重されているわけである。こうしてみると、Haberらの検出方法によっても、変動型の直観像に正当な評定を与えることができないし、自発的な直観像をも喚起させないことになるのはいぜんとしてJaenschらのばあいと同じなのである。

3 衝立検査の修正

これまでのわれわれの経験^{12,13,14)}からすれば、残像検査も省略して差支えないように思

* なお、Jaenschらは原刺激の提示時間の長短に応じて、素質者においては残像、直観像、表象が別々に喚起されるとも考えていたようであるが、しかしAllport, G. W. (1928)も指摘する³⁾ようにそれには根拠がない。

われる。それというのは、この種の残像検査によって陽性の色調を生ずる被験者はほとんどいないと言えるほど少ないからである。小学生を被験者としたとき365人中4人であり、大学生のばあいには306人中1人にすぎなかったというのがそれである。この数少ない被験者はいずれも直観像検出検査をとおして直観像素質者であると判定されたが、しかし他の大部分の直観像素質者が陽性残像を見ることはないというのがわれわれの得ている結果なのであるから、残像検査は実施する必要はなくなるのである。さらに、残像の色や持続時間というものは使用した原刺激の強度や衝立面の明るさなど実験室内の客観的条件によってかなり強い影響を受けるものであって、これらの条件についての統制がなされない以上それらを測定し基準としてみてもそれほど意味があるとは考えられないからでもある。

従って、われわれが修正した衝立検査においては「絵画による直観像検出」だけが実施されることになる。衝立面の大きさは72.0cm(タテ)×60.0cm(ヨコ)とし、衝立面はHaberらのばあいと同じように被験者と反対側に少し傾ける。原刺激絵画の大きさは31.0cm(タテ)×26.0cm(ヨコ)とし、4枚の絵(色彩絵3枚、白黒のシルエット1枚)を準備する。図版1(カラー写真)にその例を示す。観察距離は60.0cmとし、顔面固定器は用いない。衝立面には中間灰色のラシャ紙が貼ってあり、その上に原刺激は1枚ずつ30.0秒間提示される。被験者にはこの間原刺激を走査して眺めさせ、原刺激を撤去した後、引続いて衝立面を眺めさせ、そこに何か見えるかを言語報告させる。被験者の報告はすべて記録され、後の直観像素質判定の資料とされる。以上の検査の実施にあたっては、JaenschやHaberらと同じように普通の明室を使用し、部屋の明るさはとくに統制しない。(もっとも、Haberらにおいては、晴天の日部屋の中に太陽の光が強く差込むようなばあい、窓にカーテンをかけるといった配慮をするとしているが、このことはわれわれにとっても同じこととする。)

ところで、このように修正した衝立検査によってもそれが原刺激を用いるかぎり自発的直観像を喚起させることは不可能なことである。従って、この点については後に見るような新しい方法が開発されなければならないことになる。それにしても、この衝立を使用する方法によって変動型をも含めた直観像検出検査を実施しようようにしたいというのがわれわれの考えである。そのためには、原刺激の細目と衝立面に見られる像のそれとの一致度という意味での正確さは取上げないようにした方がよいと考えられる。そして、見られる像が直観像かどうかのきめ手となる事項としては、

- ① 衝立面上に像を見るとき眼を走査するかどうか。
- ② 像の持続時間(像が直観像であれば、ほぼ30秒間以上続く。)
- ③ 言語報告は現在時制によるか。
- ④ 像が頭の中にあるのではなく、衝立面に投映されているか。

⑤ 像の色は陰性ではなく、かならず陽性であること。

があげられる、というのが今日でのわれわれの見方となっている。

Haber らのやり方に従うかぎり、被験者の反応は数量化され尺度化され、基準に従って判定されるので、直観像素質者と非素質者とはきわめて截然と区分されることになる。ところが、実際にわれわれが被験者の反応に接しながらその判定に従事してみると、はっきりした素質者とはっきりした非素質者との間には中間者とでも言う者が少なからずいることに気付くのである。その上、中間者についても、より素質者に近い者や非素質者に近い者などが認められるのである。してみれば、直観像の素質というのは一連の高低のレベル（あるいは段階）をなしていると考えるのがより自然だというものである。冒頭に述べたように、直観像の鮮明性や明細性が一連の連続線上にあることはこれと強いつながりがある事実である。以上の点から見れば、Haber らの方法は、きわめて明確ではあるにしても中間者や中程度の鮮明性や明細性の直観像を切捨てることになり、不自然さを含んでいると言わなければならない。このようなわけで、Jaensch 以降後の影響を受けた研究者たちでは直観像素質についての段階づけが試みられていることは今日でもわれわれにとって尊重しないわけにはいかないことなのである。

そこで、われわれは次に述べるような4つの段階を設けるのが適切であると考え。ここの段階づけにおいては、衝立面上に見られる像の

- ① 強さ（鮮明性）
- ② 情報量の大きさ
- ③ 被験者が像に対してもつ具体的な意味性の有無・程度

を基準とすることにした。①、②、③は変動型直観像にも静止型直観像にも共通して認められるものである。このようにしたのは、Jaensch らのやり方では変化しない正確な知覚のような直観像だけが高段階に位置づけられ、他方変動を示す像には然るべき位置づけがなされないことになってしまうからである。

〔段階0〕

像の報告が全くない（非素質者）。

〔段階1〕

はっきりしない点や影や色彩、模様状など被験者にとって具体的な意味をもたない物を報告する（ごく低度の直観像素質者）。

〔段階2〕

原刺激と何らかの関連があるか、なくとも1つないし2つ、3つの意味をもつ部分、物が見える（低度の直観像素質者）。

【段階3】

原刺激と何らかの関連があるか、なくとも2つ、3つ以上の意味をもつ部分、物が見える（高度の直観像素質者）。

なお、比較のため Jaensch およびその影響を受けた研究者による段階づけを次に示す（表1）。

表1 諸家の直観像素質程度の段階づけと対象

イェンシュ	クロー	フィッシャーと ヒルシュベルグ	ツェーマン	大脇
V アラユル個々物ノ 最モ鮮明ナル直観像、 像ニ就イテ各方面カ ラノ実験ガ出来ル	A 高イ殆ド幻視的ナ鮮 明度ヲ持ツク忠実ナ 像、殆ド本来ノ知覚 ノ生キ生キサト感覚 的分明度ニ比シテ大 ナル徑庭ナシ	(4) 呈示円全体ノ最モ鮮 明ナル直観像、円ノ 個々ノモノガ殆ド全 部残ラズ見エル	A	A
IV 複雑ナル客体カラノ 中庸度ニ鮮明完全ナ ル直観像	B 呈示サレタモノノア ル部分ダケガ再ビ現 レル然シソノ分明度 ニ於テハ殆ド変ラズ	(3)	B	B
III 簡單ナ呈示物件ニ色 紙ヨリノ弱キ直観像、 複雑ナ呈示物ヨリモ 僅少ノ個物又ハ輪廓 ダケガ現ワレル	C モトノ呈示サレタモ ノノ中ノ二三ノ例エ ハ特ニ興味アル物ダ ケガ見エル	(2) 何等個々ノモノ又ハ 部分ハ見えズ唯ダ全 体トシテ等質的ナ色 調ヲ持ツ直観像ガ成 立スルノミ	C	C1
II 簡單ナ呈示物件ニ色 紙ニヨリテノミ直観 像ガ得ラレル、複雑 ナ呈示物カラハ全然 得ラレナイ	D 色彩面トカ影トカ輪 廓ガ見エルダケニ止 マル			C2
I 複雑ナ呈示物カラハ 無論ノコト簡單ナ呈 示物カラモ直観像ハ 全然出テ来ナイ、タ ダ残像ヲ通ジテ僅カ ニ直観像ヲ窺知シ得 ルノミ 例エバエム メルト法則カラノ脱 逸ナドニヨリテ窺知 シ得ルノミ		(1) 残像ヲ通ジテノミ直 観像素質ヲ窺知シ得 ル即チソノ残像ハ直 観像素質ノ無イ者ニ 於ケル残像ノ従ウ法 則ニ従ワナイ		
0 結果ガ全然消極的、 残像モ普通ノ性質ノ 而モ普通ノ短イ持続 時間ヲ示スノミ				

大脇義一「直観像の心理」から

以上の方法を大学生306人を対象として実施した。その結果、18人(5.9%)が段階1以上の直観像素質をもつものと判定された。

4 自発的直観像の検出法

伝統的な衝立検査においては変動型の直観像への位置づけが無視されていたが、われわれが修正した方法によってそれが可能となったわけである。しかし、それによっても自発

的直観像は形成させることはできないまま残されていた。このような情勢の中でその課題を解決する有望な方法として登場したのが畠山孝男(1974, 1975)の空白円検査 (open circle test) である。

畠山^{6,7)}は、大学生を被験者とし、直観像ではなく色彩心像の投映実験からその方法を見いだしたのである。つまり、それを試みていたとき、ほぼ偶然に直観像らしい反応があることを検出し、像の内容や被験者の日常生活における直観像など種々検討した結果それが自発的直観像であることが確認されたのである。ところで、この発見は、わが国では直観像研究がそれほど盛んではなく、また畠山によって見いだされた直観像素質者が1人にすぎないなどの理由からいわば放置されてきた。しかし、このことはHaber以来盛んになったアメリカを中心とする海外における直観像研究に重要な一石を投ずることになったのである。

ともあれ、こうしてみると直観像研究は検出の方法論的側面に沿って2つの方向に区分されることになる。Ahsen, A. (1977)は、それを印刷的方法 (typographic method) と構成的方法 (structural method) と呼んでいる¹⁾。印刷的方法とは伝統的な衝立検査を主体としたものである。他方、構成的方法は内部喚起の直観像の研究に用いられるものである。

Ahsen自身は構成的立場に立つとして、直観像を「鮮明に経験される主観的な視覚的像である。そして、直観像は必ずしも外部の事物によって喚起される必要はなく、以前の実際の状況に依存するものでもない。心の外にせよ、内にせよ、それは文字どおりの意味において見られるもの」であると定義する。具体的には、自分の母親の顔とか姿などを思いださせるやり方を用い、いわゆる心眼に浮かぶものも直観像とされる。こうしたことから、Haberらの基準による直観像現象は狭すぎてその全容を十分に説明できないのではないかと批判する。

Ahsenのとくに「心の内に見られるもの」という考えについて異論をさしはさむ研究者は多いことであろう。直観像は何とんでも外界に投映され見えるものでなければならぬからである。その方法についても他の記憶心像などを喚起するものと区別できないことは明らかである。自発的直観像についても、それが被験者の眼前に投映され(心眼ではなく実際の)眼に見える方法が確立されなければならないのである。この点についてもう一度言わせていただければ、次に述べる畠山の空白円検査がまさにそれに応えるものとなっている。

(1) 空白円検査

図1に示すような空白の円を含んだ白カードを、机に向って椅子に座った被験者の手に渡す。被験者はそれを手にもって自由に眺めることができる。実験者は、「その円のなか

に、赤い（黄、青、緑）色が見えるように努力してみてください。』と指示する。それぞれの色についての試行が終了した後に、見えたものについて報告を求め、必要に応じて記録用紙の上に見えたとおりに描写してもらおう。そのために色鉛筆を用意する。1回の試行は3分間とする。

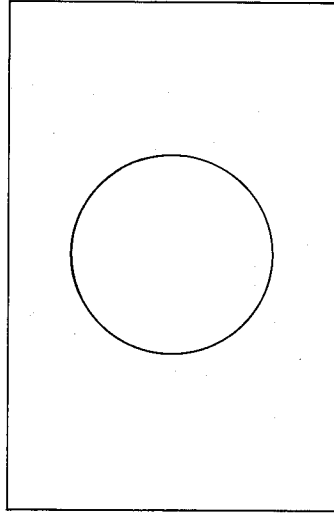


図1 空白円検査に用いるカード

12.5cm（ヨコ）×20.0cm（タテ）の白カード。中心に直径4.0 cmの円が描かれている。

畠山に従えば、かなり多くの者がそこに色を見るのであるが、ひとりの被験者では色彩だけではなく、そこから具体的な赤いボートとか人の顔といった意味のある形態が見られるようになり、直観像素質者と判定された。その後、Marks, D.ら(1982)は同様のやり方によって、自発的直観像を喚起した2人の大学生の例を報告している¹¹⁾。われわれが大学生306人についてこれを実施したところでは、形態的反応（段階1以上）を示し、キノコとかトンボ(昆虫)とかタンポポの花といった意味のあるものを見た者は7人(2.3%)であった。

こうしたわれわれ自身の経験をも経た現在、われわれは畠山やMarksらの資料も検討した上で「(特定の)色を見るように努力してみてください」というよりも「(色でも)形でも何でもよろしいですから見るように努力してみてください」との指示を与えてはどうかと考えている。それは、ある被験者がカードを眺めて間もなく「色ではなく形を見たいのですが、そうしてもよろしいですか」と言うので、「そうしても結構です」と答えると、「それでは」と言いながらほどなく「あっ。(形のあるものが)見えてきた」ということになったのが主要な理由である。

さらに、この空白円検査による直観像の判定にあたっては見られた像の内容から次のような段階づけをおこなうことにした。ここでも、われわれの衝立検査のばあいと同じように見られる像の強度、情報量の大きさ、意味性や具体性が基準とされる。

〔段階0〕

何ら形態的な像が報告されない。たんに色を見るばあいもここに位置づけられる。

〔段階1〕

はっきりとはしないけれども何か具体的な像や影が見える（きわめて低度の直観像素質者）。

〔段階2〕

ややはっきりとした具体的な意味のある像が見える（低度の直観像素質者）。

〔段階3〕

鮮明で具体的な意味のある像が見える（高度の直観像素質者）。

(2) 白紙検査

日常生活において直観像をもつある婦人は、子どもの頃から白い画用紙が自分にとって特別な意味をもっていて貴重な好ましいものだったし、現在でもそうだ、と述べている。白い画用紙を見ていると、そこに何かが見えてくるというのである。小学生の頃、画用紙を眺めていたら、赤ちゃんが座敷を這うところが見えたのでそのとおり描いて学校に提出したら、先生にたいそうほめられたことがあるという。しかも、このような述懐をする者は一人にとどまらないのであって何人かの例をあげることができる。

こうした例から、被験者に白紙を与えて自由に投映させるやり方はかなり妥当性が高い自発的直観像検出法になるのではないかと考えられる。それに、空白円検査を見ても、白紙の中央に円はなくともよいのではないかとも思える。

そこで、材料として12.5cm（ヨコ）×20.0cm（タテ）の白カード（空白円検査と同じ大きさ。ただし、円は描かれていない。）を作り、これを被験者に手渡し、「そこに何でもよいですから、自由に見るように努力してみてください」と指示を与えて検査を実施することにした。制限時間は3分間とし、終了後に見えたものについて報告を求める。報告に際しては、必要に応じて白紙に見えたとおりに描いてもらうことにする。

この白紙への投映検査においても判定にあたっては像の内容から次のように段階づけをすることにした。像の強度、情報量の大きさ、具体性や意味性の有無・程度が段階づけの基準とされることはこれまでと同様である。

〔段階0〕

全く像の報告がない。あるいは、ただ見えるような気がするだけというもの。

〔段階1〕

はっきりしない影や形のようなものが見えるというもの（きわめて低度の直観像素質者）。

〔段階2〕

やや具体的でそれが何であるか意味がわかるものが見える（低度の直観像素質者）。

〔段階3〕

鮮明で具体的な意味をもつものが見える。または、次々と変化していく鮮やかな像が

見える（高度の直観像素質者）。

この検査を適用した被験者は空白円検査のときと同じ大学生306人であった。その結果、何らかの像を見ることができる者は30人(9.8%)であった。

5 修正した衝立検査と空白円検査と白紙検査との関連

これまでに述べた修正した衝立検査および空白円検査、白紙検査については同じ大学生306人を対象として実施した。これらの検査で得られた直観像素質者の人数(出現率)を一括すると表2として示される。それぞれの段階1以上の素質者の人数(出現率)は表3のとおりである。

表2 直観像素質者の人数(出現率) 306人の大学生を対象にし、それぞれの検出によって段階1以上と判定された者の人数(百分率)

修正した衝立検査	空白円検査	白紙検査
18人 (5.9%)	7 (2.3)	30 (9.8)

表3 3種類の検査法によって段階1以上に位置づけられた者の人数(百分率)

検出法 段階	修正した衝立検査	空白円検査	白紙検査
1	5人 (1.6%)	3 (1.0)	17 (5.6)
2	5 (1.6)	2 (0.7)	7 (2.3)
3	8 (2.6)	2 (0.7)	6 (2.0)

まず、上の2つの表によれば白紙検査において積極的な反応を示した者は30人であるけれども、その30人のなかで空白円検査によって形態反応を示した者はわずか4人にすぎないのである。さらに両検査の差(CR=14.90, 1%の有意水準で白紙検査の方が出現率は大きい)が認められるところから、白紙検査の方が空白円検査よりも自発的直観像を幅広く検出できると言えそうである。つまり、それは妥当性がより高いという結論が導かれそうである。

ただし、ここで取上げた空白円検査の結果は、被験者への指示がカードの円内に「色」を見るように努力させるといったものであった。もし、この指示をすぐ前に指摘したように「(色でも形でも)何でもよいから」見るように、といった改良を施せば上述の結論は異なったものとなるかもしれない。

しかし、被験者への指示を改めるとすれば、2つの検査はほとんど同じやり方となるのであって、異なるのは中心に描かれた空白円があるかないかだけである。従って、厳密に

言えばその円が自発的直観像の形成を促進するものとなっているのか阻害するものとなっているのか、あるいは何も影響をおよぼさないものなのかどうかを確定する必要が生じてくる。もし、それが直観像の現出を阻害するとかそれに影響をおよぼさないとすれば、空白円は要らないことになり、空白円検査はやらずもがなのものとなる。その場合、白紙への投映検査が活用されることになる。

また、修正した衝立検査においては18人が段階1以上の直観像素質をもつ者と判定されたが、そのなかで白紙検査において積極的な反応を示した者はかなり多く、14人(77.8%)であった。このことから、直観像素質者の大部分(80%弱)は、自発的(内部発生的)にでも外部刺激によってでも直観像を形成することができる、と言えるようである。

大部分の直観像素質者が、自発的にも外部刺激によってでも直観像を形成しようということになれば、直観像素質者の検出のためには白紙への投映検査か衝立検査かのどちらか一方を実施するだけでよいのではないか、と思われるかもしれない。しかし、一方は自発的直観像検出の役割をもつものであり、他方は外部刺激による直観像検出のためのものであり、互いにいえば別種の方法なのである。さらに、一つの種類の直観像しか検出できない者が、われわれの結果から判断するところでは、直観像素質者の少なくとも20%はいるのであって、無視しえない数である。従って、直観像(素質者)の検出にあたっては、どちらか一方だけではなく、衝立検査と白紙検査との両方を実施することが望ましいと考えられる。どちらか一方の検査においても直観像を見る者は直観像素質者とされるわけである。

6 要 約

- 1) 直観像はけっして一様に見えるのではなく、その鮮明性や明細性は一連のレベル上にある。また、直観像にはそれを形成させるものの面から見ると外部刺激によって生ずるものと自発的に生ずるものがある。さらに、像の内容のあり方からは静止型のもの変動型のもものが認められる。
- 2) 外部刺激による直観像の検出にはわれわれが修正した衝立検査が用いられる。ここでは、従来の色紙検査や残像検査は不要とされる。直観像素質の判定にあたっては段階づけがなされる。この際、基準を工夫することによって静止型のもの変動型のもも段階づけることが可能である。
- 3) 自発的直観像の検出には空白円検査および白紙検査を適用することができる。どちらにおいても直観像素質の判定には段階づけをおこなうことができる。われわれには白紙検査の方が空白円検査より妥当性が高いと考えられるが、しかしこの点に関してはさらに検討を要しよう。

文 献

- 1). Ahsen, A. 1977 Eidetics: An overview. *Journal of Mental Imagery*, 1, 38-58.
- 2). Allport, G. W. 1924 Eidetic imagery. *British Journal of Psychology*, 15, 100-120.
- 3). Allport, G. W. 1928 The eidetic image and the after image. *American Journal of Psychology*, 40, 418-427.
- 4). Busse, P. 1920 Uber des Gedächtnisstufen und ihre Beziehung zum Aufbau der Wahrnehmungswelt. *Zeitschrift für Psychologie*, 84, 1-66.
- 5). Haber, R. N. & Haber, R. B. 1964 Eidetic imagery : I Frequency. *Perceptual and Motor Skills*, 19, 131-138.
- 6). Hatakeyama, T. 1974 The process of having identified an adult eidetic person and her eidetic experiences in daily life. *Tohoku Psychologica Folia*, 33, 102-118.
- 7). 畠山孝男 1975 無彩色上への色彩心像の現出：予備研究 山形女子短期大学紀要, 7, 11-35.
- 8). Hatakeyama, T. & Onizawa, T. 1982 The "open circle" test identifies an eidetiker, but does not prove the universality of eidetic imagery. *Journal of Mental Imagery*, 6, 56-59.
- 9). Jaensch, E. R. 1930 Eidetic imagery, Kegan Paul.
- 10). 北村晴朗 1982 心像表象の心理 誠信書房
- 11). Marks, D. & Mckellar, P. 1982 The nature and function of eidetic imagery. *Journal of Mental Imagery*, 6, 1-28.
- 12). Onizawa, T. & Seki, Y. 1974 Personality characteristics of the "change type" and the "no change type" of eidetic image. *Tohoku Psychologica Folia*, 33, 88-92.
- 13). Onizawa, T. & Seki, Y. 1975 Recall of eidetic children. *Tohoku Psychologica Folia*, 34, 33-37.
- 14). 鬼沢貞・衛藤順子 1976 直観像(素質)と幻覚 臨床精神医学, 5, 125-131.
- 15). 大脇義一 1970 直観像の心理(増補版) 培風館
- 16). Richardson, A. 1969 Mental imagery. Kegan Paul. 鬼沢貞・滝浦静雄訳 1973 心像 紀伊国屋書店



図版 1 衝立検査用原刺激絵の一例